

# 2 大和川と地域のあゆみ

## (1) 昔の奈良盆地

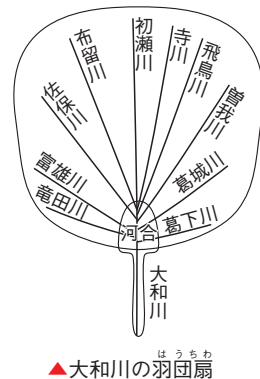
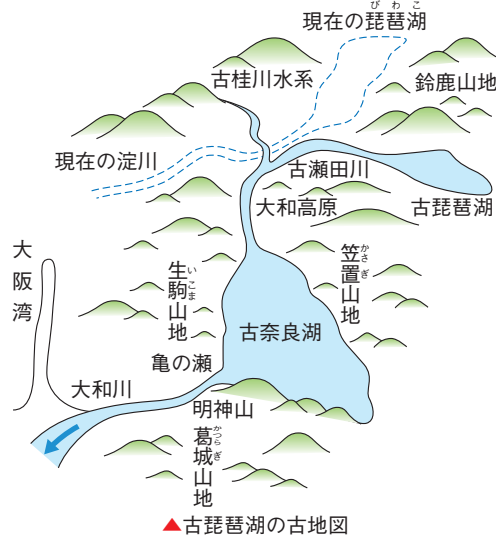
今から300万年ほど前の奈良盆地は、古奈良湖といわれる湖でした。そのころ、生駒山地がせり上がって、亀の瀬の谷ができ、古琵琶湖の水を合わせて、大阪側に流れ出しました。

約150～100万年ほど前に紀伊半島がせり上がり、奈良盆地ができ、南北は

高くまん中が低い地形となりました。そして古琵琶湖は北へ移動して当時できた淀川に水は流れ、生駒山地の西側の河内湾に流れ込むようになりました。

地名に河合町という名があるように、南から初瀬川、寺川、飛鳥川や曾我川などの川が集まり、北からは佐保川、秋篠川、富雄川、竜田川など156もの支川が集まり「奈良盆地のへそ」と言われるような低い土地になりました。

それは竹の骨が枝分かれています。「羽団扇」の形をしています。



すが、一箇所に河川が集まるため、この地域の洪水や水づかりの原因となりました。広瀬神社の水足池は、古奈良湖の名残りです。

## 奈良盆地の地形と開発

奈良盆地はまわりを山にかこまれてまん中が低くなっていて、ちょうどお皿のような形をしています。今から1万年ほど前まで、盆地のまん中は湖（古奈良湖）でした。古奈良湖の水は生駒山地と葛城山地のあいだの谷をとって大阪に流れ出ていました。

また、古奈良湖にはまわりの山からたくさんの川が流れこんでいました。これらの川はまわりの山をけずって下流に土砂をはこびました。今の奈良盆地は、初瀬川や曾我川、富雄川などがはこんできた土砂で古奈良湖がうまってできた土地なのです。

やがて、まわりの山のふもとにくらしていた人びとがこの新しく生まれた土地にきて田畑を作るようになりました。そして、人びとは水はけを良くしたり川の流れを変えたりして豊かな農地に変えていきました。特に、奈良時代には条里制にあわせて川の流れも変えました。

しかし、盆地の底にあたるほど土地が低いので、洪水になると川の水があふれやすく、今も洪水へのそなえがたいせつです。

## 条里制

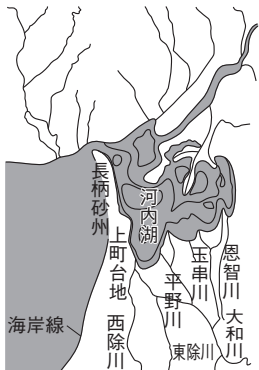
1000年以上も前に近畿地方を中心に広く行われた土地区画せいのこと。農地をぎょく目のように直角の区画に作り変えた。たてを条、よこを里という。これによって農地の大きさ、形が同じになり、かんりしやすくなった。

## おおさかへいや (2) 大阪平野と大和川



▲河内湾の時代  
(約7000～6000年前)

今の河内平野は7000～6000年ほど前までは、後に河内わんといわれる海でした。その後、今の淀川や石川と大和川の合流地点から多くの支川が北の海に入りこみ、土砂がつみ重なって河内湖から河内平野になりました。



▲河内湾の時代  
(約1800～1600年前)

しかし、南から北への傾斜がゆるやかなため、川は蛇のように曲がり、土砂をつみ上げるだけでなく、天井川となってよく洪水がおこりました。その結果「河内」という地名ができたといわれています。

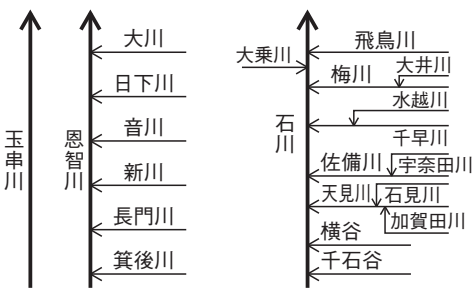
300年ほど前まであった新開池、深野池は河内わんが浅くなった河内湖の名残りです。

生駒山地の河内平野は急斜面で、流れる急流の川は恩智川に流れこみ、金剛山地の各川は石川に流れこんでいます。

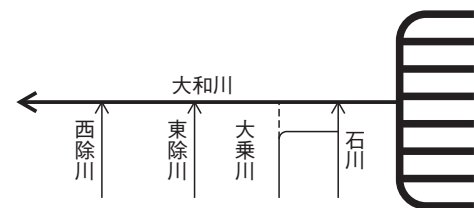
その流れは櫛歯の形をしています。

1704年の大和川のつけかえにより、大和川もやはり櫛のような形になって大阪湾に流れこんでいます。

河内平野では3000～2000年ほど前に米作りをしていた村がたくさん見つかっています。



▲大和川の3つの櫛歯



### (3) 古墳文化を支えた大和川

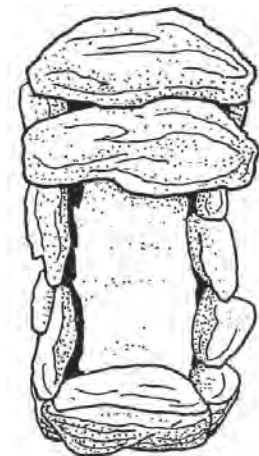
#### 巨大な石を舟やいかだで運んだ古墳づくり

石川の西岸に、日本で2番目に大きい<sup>こんだ</sup>誉田山古墳など64の古墳が集まっている<sup>ふるいちぐん</sup>古市古墳群があります。400年から600年ごろに多くつくられました。

古墳のひつぎを入れる石室は、巨大な石を組合せてできています。石は九州地方の<sup>あそ</sup>阿蘇石や兵庫県<sup>たかさご</sup>高砂市の<sup>たつやま</sup>竜山石が使われています。

巨大な石は、どのように運んだのでしょうか。

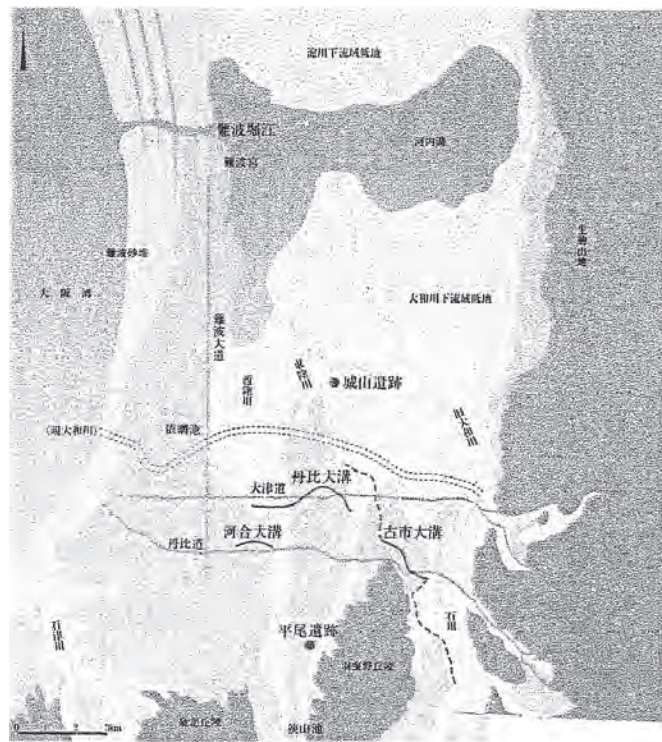
舟やいかだにのせて、瀬戸内海を渡り、今の天満橋附近の<sup>なにわづ</sup>難波津から、<sup>ひがしよけ</sup>平野川、<sup>ふるいちおおみぞ</sup>東除川から古市大溝という幅20m、深さ7mの<sup>はこ</sup>運河をへて、運ばれたと考えられています。大昔の大和川は、古代の都を支えていたのです。



▲箱式石棺



▲古市古墳群



▲南河内の池溝開発

#### 巨大な石を運んだ修羅を発見 (写真提供は藤井寺市教育委員会)

1978 (昭和53)年4月に、<sup>みつつかこふん</sup>三ツ塚古墳の堀から、長さ8.8mと2.9mの大、小のY字型の、大きな石を運ぶ木そり (修羅) が発見されました。



▲藤井寺図書館の展示



▲発見された修羅

9月には、カシの木で、実物と同じ修羅をつくらせて、10トンの石をのせ、下に鉄道の枕木のように丸太をしいて、中学生300人と市民100人が「エイシヤ、エイシヤ」のかけ声で引くと、45秒で15mも動きました。

現在、大きな方の修羅は、<sup>ちかあすかはく</sup>近つ飛鳥博物館にあります。模<sup>も</sup>型<sup>けい</sup>と小さい方の実物は、藤井寺市立図書館に展示されています。

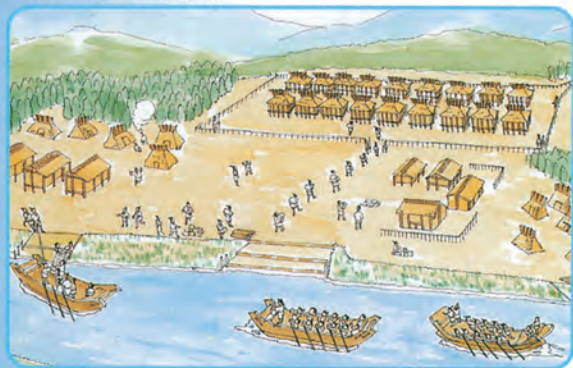


古墳  
天皇や有力者などの墓。  
土を盛りあげて築かれたものが多い。



▲高井田古墳の舟のへき画

難波津の想像図（今の大阪市北浜あたりと考えられています。）



官道  
国が整備した道で、今の国道のこと。大津道、丹比道（竹内街道）などがありました。

## （4）交通路としての大和川

### 1 古代の大和川を利用した交通

大昔から大和川は交通路として利用されてきました。そのころ、大和川は亀の瀬の谷をこえて大阪に入ると、枝分かれして北へ進み、京都から流れる淀川に合流していました。大阪府柏原市高井田にある古墳から、舟をあやつっているようすをえがいたと思われるへき画が見つかっています。

### 大和川の上流に都があったころ

奈良の飛鳥に都があったころ、しだいに都と地方をむすぶ官道が整えられていきました。そのころ、大和川は古代日本のげん関口であった大阪の港「難波津」と、奈良ぼん地にある都とをむすぶ川の道として大事にはたらきを持っていました。

607年に聖徳太子が中国の隋に



つかわした遣隋使の小野妹子は、次の年、中国の使者をつれて帰ってきました。一行は瀬戸内海を通過して難波津に入り、船を乗りかえて大和川をさかのぼり、奈良県桜井市三輪のあたりの港（海石榴市）でおり、飛鳥の都に着いたと伝えられています。

### 2 奈良の都と大和川

藤原京は、日本で初めての大規模な首都でしたが、16年で終わり、建物も解体し、平城京に運ばれました。佐保川を利用した船や1万人以上が徒歩や馬でひっこしたと想像されています。

地方には竪穴住居があった時代ですが、貴族はきらびやかな衣装をつけて御殿に住んでいました。

東と西の2つの市に全国から集められた品物がならびにぎわいました。



▲船でのひっこしと市のようす想像図（奈良文化財研究所監修「平城京再現」より）



▲奈良市役所に展示されている平城京復元模型と2010年平城京遷都1300年を記念して復元された大極殿の写真

### 3 江戸時代の大和川を利用した交通

大和川の川すじは、300年ほど前に大きく変わりました。しかし、奈良盆地と大阪平野とをむすぶ大和川の交通路としての役わりは、100年ほど前に鉄道がつくまで変わらずに続いていました。

今から400年ほど前、大阪は「天下の台所」と言われ、たくさんの品物が流通する中心地として栄えていました。奈良と大阪との間には生駒山地などの山が南北につらなっているので、船を使って大和川を利用し、さかんに品物や人が行き来していました。しかし、大和川の奈良と大阪との境にあたる亀の瀬は、岩が多く、流れが急になったり滝になったりしていたので、船で通れません。そこで、品物は亀の瀬で奈良側、大阪側の船に積みかえられて、奈良や大阪に運ばれました。また、使われた船は、亀の瀬を境として奈良側では魚梁船、大阪側では剣先船とよばれていました。大阪のまわりの村々と大阪の中心とで品物を運ぶ、柏原船や国分船などという船もかつやくしました。

大和川の川すじが大きく変わった話は、次の「3大和川を治める」のコーナーで学習しますよ。

あなたが住んでいる所には、大和川を利用した交通のあとは残っていませんか。家の人や家の近くの人、地域の歴史にくわしい人に聞いて調べてみましょう。



大和川を運こうしていた船

	柏原船・国分船	剣先船	魚梁船
運こうしていた地域	大阪京橋と柏原村や国分村の間	大阪京橋と亀の瀬の間	亀の瀬と奈良の各地の間
運んでいた品物	大阪へ…米, 油, 綿, しょう油, 大阪の中心から各地の村……ほしかなどの肥料, 塩, 炭	大阪の中心から奈良各地へ……ほしかなどの肥料, 塩, 炭, 砂糖, 紙, 酒, せと物など	奈良各地から大阪の中心へ……米, 小麦, ざっこく, 綿, なたね油, そうめんなど
船の大きさ	長さ…約 14m, はば…約 2m 荷の重さ…約 1500kg	長さ…約 22m, はば…約 2m 荷の重さ…約 3000kg	長さ…約 15m, はば…約 1.5m 荷の重さ…約 1000kg

#### 4 やまと さんぎょう や なふね 大和の産業と文化を高めた魚梁船



魚梁船は、江戸時代のはじめ、1610年にたつ た はんしゅかたぎりかつもと 竜田藩主片桐且元が、ねんぐまい 年貢米を大阪に運ぶために始められました。その時、片桐且元は大和と河内の境にある亀

の瀬の工事をして、岩を取りのぞき、滝や急流をなくそうとしましたが、できませんでした。そこで、亀の瀬より大和の各地へは魚梁船を航行させ、亀の瀬より大阪の中心までは剣先船を航行させることになったのです。

大阪から大和や河内に運びこまれる干鰯や油かすなどの肥料の多くは、江戸時代から明治時代にかけてさかんに行われた綿作りに使われました。そして、大和や河内で作られた綿が大阪に運びこまれ、農家も大阪商人もうるおったのです。

今の河合町の御幸橋の南東にあった川合浜や、対岸の安堵町笠目にあった「御幸ヶ瀬」は、たくさんの荷物が集まるところでした。川の南にある川合浜には市が立ちなれば、荷物や人が行きかったため、「市場」とよばれるようになりました。また、さらに上流へも荷物は運ばれ、初瀬川は天理市

の天神（今の嘉幡周辺）まで、寺川と飛鳥川は田原本町の今里と松本まで、佐保川は大和郡山市の板屋ヶ瀬と筒井まで運んだそうです。



▲「川合浜」で栄えた河合町川合の市場地区の町並み



#### 5 大和川のつけかえと柏原船や剣先船

大和川は大阪平野に入ると北に向かい、久宝寺川や玉串川などに分かかれ、たびたび洪水を起こしました。

河合町の市場地区の大通りにはたくさんの店があったそうだよ。宿屋や料理屋、芝居小屋、市が立つ場所もあったそうだ。



▲大阪から来た剣先船の荷物を魚梁荷場舟役所を通過して魚梁浜で魚梁船に荷物をのせかえて運びました。

藤井問屋(上の地図下) 剣先船で運ばれてきた荷物を下ろし、魚梁船ではなく、牛馬を使った荷車で大和の各地に運びました。



▲綿をつむぐ(綿圃要務より) 「大和河内和泉の三ヶ国の田地にては、女に限らず男子もみな糸をつむぐなり」と言われるほど、綿作りがさかんでした。

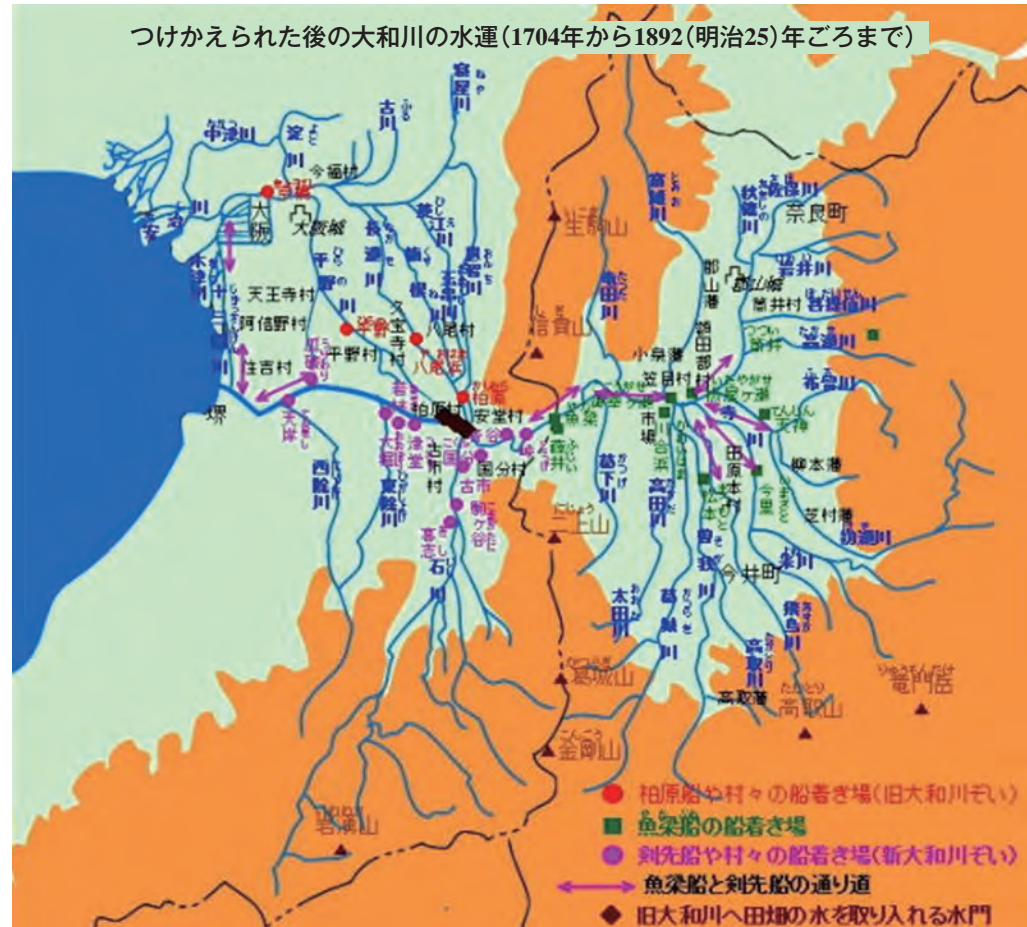


京橋や難波の港で荷物を積みかえて、大阪の町の中の問屋へ運ぶのは、上荷船という船が運んでいたそうだよ。

船の大きさや荷揚げをする港は、ちゃんと許可をもらって決められていたそうだよ。

1620年と1633年に大洪水で被害を受けた柏原村を立ち直らせようと、平野と河内の代官であった末吉孫左衛門は、大阪奉行所の許可を得て、柏原村から平野を通過して大阪京橋まで向かう柏原船を運行させました。同じように、柏原村の南にあった国分村でも、国分船を仕立て、京橋まで荷物を運びました。柏原船や国分船が、大阪の中心から河内平野の農村に肥料を運び、米や綿などの農作物を集めることで、大和川流域の農村も豊かになっていったのです。

しかし、1704年に行われた大和川のつけかえ工事で、大和川は石川と合流すると北へは向かわずに、西の堺へ向かうようになりました。北へ向かう長瀬川（旧大和川本流）や平野川などの水量は少なくな



りましたが、大和川から旧大和川の地域に田畑で使う水を送る水門もでき、新しい田畑がたくさん開かれました。新開池や深野池と大きな池もうめ立てられ新田になりました。川や池をうめ立てて開発された新田は砂地だったため、米作りはしにくいため、綿作りがおこなわれました。作られた綿は、柏原船などでさかんに運ばれましたが、旧大和川では水量が少なくなったため、川もせまく浅くなったので、船での運送は少しずつすたれていきました。

剣先船や国分船など新大和川ぞいの村々の船は西の堺へ向かい、海の近くで新しく作られた十三間川を北へさかのぼり大阪の中心に行っていました。

江戸時代の終わりになって日本が開国すると、外国の安い綿織物が輸入されるようになり、日本の綿作りはすたれていきました。河内や大和の綿作りも、なくなっていました。

明治に入り人の行き来が多くなると、魚梁船と剣先船は荷物だけでなく、人も運ぶようになっていました。しかし1892(明治25)年には、奈良と大阪湊町が鉄道で結ばれ、魚梁船から剣先船とつながれた大和川の水運はなくなりました。

久宝寺川ともよばれていた大和川の本流は、水量がきよくたんになくなり、名前も長瀬川とかわったそうだよ。新開池や深野池などの大きな池はうめ立てられてなくなり、吉田川などの川もなくなったそうだよ。水量が少なくなったため、すみずみの田畑に水を送るための用水路が発達したそうだよ。



大和川の本流であった長瀬川には2つ、平野川に1つの水門が作られ、田畑や人々の生活に必要な水が送られたそうだよ。今では田畑が住宅に変わったところが多いけれど、今でも水門の管理をしている人たちがいるそうだよ。



▲築留二番樋(堤防の向こう側が大和川)